樫の木は、両手を広げ

樫の木は、両手を広げ　中編

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=16937032

ダイの大冒険, マァム, ヒュンケル, ヒュンマ, ヒュンマフェス

前編から少し時間が経過。
物語の「転」。

このあたりから各キャラの動きが激しくなり、作者も混乱し出したので、エクセルで各キャラの行動表とか作って整理していたとかいう、やっぱり作者泣かせな話。

2022.2.5開催ヒュンマフェス・ウインター合わせ。
2022.3.21表紙差し替え。表紙の写真は、photoＡＣhttps://www.photo-ac.com/様でお借りしました。umo（ゆも）様の「樫の木と新緑」という作品です。

樫の木は、両手を広げ　中編

　マァムは、礼拝を終えて、シモンとともに教会を出ると、その建物の前で、二人の少女に行きあった。
　年の瀬の迫るこの季節、外の気温は下がっていたが、この日は陽が出ており、昨日よりも温かかった。
　教会の樫の木の下で、１０歳くらいの幼い少女と、それよりも少し年上の少女が手をつないでいた。
　幼い少女は、濃い栗色の髪をしており、それを２つに結わっていた。
　年長の少女は、濃いめの亜麻色の髪を、背中で一つに束ねており、鮮やかな明るい色彩のゆったりとしたズボンをはいていた。
　マァムたちが教会の入り口から外に出ると、幼い少女がマァムに気付いて手を振った。
「マァムお姉ちゃん！シモンお兄ちゃん！」
　マァムも答えた。
「ミーナ。エリカも。」
　エリカも、マァムに気付き、軽く手を振った。
　マァムはエリカに尋ねた。
「礼拝に来たの？」
「うん。おじいちゃんの体調があんまりよくないから、神様にお祈りしようって。」
　エリカがマァムに答えた。
「マァムちゃんも？シモンと来たの？」
「中で会ったんだよ。」
　エリカの問いに、シモンが答えた。
　マァムは、レイラとともに数日前に往診し、薬を届けたばかりのエリカの祖父を思い出した。高齢であり、心臓が弱っていたため、気付けの薬をレイラが処方していた。心配な状態であることは間違いなかったが、マァムは、それを二人の少女に感じさせたくはなかった。
　マァムは、穏やかに微笑むと、二人の少女に声をかけた。

「エリカのおじいちゃん、早く良くなるといいね。」
「歳だからね。しょうがないんだけど。
　ありがとう、マァムちゃん。」
　エリカは困ったような顔でマァムに答えた。
　ミーナとエリカ、二人の家は隣同士で、日ごろからよく行き来をしており、姉妹のように育っていた。ミーナにとって、ミーナを孫のようにかわいがってくれるエリカの祖父は、自分の祖父も同然だった。
　ミーナは、不安げにエリカを見上げた。
「お姉ちゃん・・・。」
　すると、エリカは、ミーナに微笑みかけた。
「大丈夫、ミーナ。今日は私が森へ行って、マッシュルームとうさぎを取ってくるんだから！それで、美味しいシチューを作ってあげる。そうしたら、おじいちゃんもよくなるからね。滋養の付くもの食べさせないと。
　ミーナのおうちにも分けてあげるね！」
「うさぎ！お姉ちゃん、獲ってこれるの？」
「昨日わなを仕掛けたのよ。この前、シモンに教えてもらったかけ方で。たぶん、かかっていると思う。
　ね、シモン。」
「あ、ああ・・・。」
　シモンは戸惑ったように答えた。確かに少し前に、エリカにうさぎを取る罠のかけ方を教えた。だが、昨日、エリカが森の中に仕掛けに行ったのだとは聞いていなかった。
　シモンはエリカに尋ねた。
「ひとりで行ったのか？」
「ええ。そうよ。」
　エリカは、あっさりと肯定した。何故そんなことを聞くのかと、不思議そうな目でシモンを見ている。
　シモンは、マァムと顔を見合わせた。二人とも戸惑った顔をしていた。
　エリカは、まだ１４歳の少女であったが、年齢よりもたくましい。

だが、彼女はまだ成人扱いではない。村の大人たちに知らされていることでも彼女の耳には入っていないことがあった。
　マァムもシモンも、ここ数日の森の様子を思い、眉根を寄せた。
　マァムは、エリカに提案した。
「エリカ、森にわなを見に行くのなら、後で私も一緒に行くわ。」
「マァムちゃん？私、一人で大丈夫よ。」
「うん。エリカはしっかりしてるものね。
　でも、冬の森は危ないからね。一緒に行ってあげるわ。」
　すると、シモンが口をはさんだ。
「俺が行くよ。俺が教えたんだし。
　それでいいだろう、マァム。」
「あ、そうね。シモンが行ってくれるなら。」
「エリカ、後で、わな仕掛けた場所教えてくれよ。」
「あ、うん。」
　マァムもシモンも、本心をエリカには語らなかった。心配させる必要はないと思ったからだ。
　ここ数日、ネイル村を取り囲む森の中で、見たことのない旅人を見かけることが増えていた。もともとさほど往来の激しい森ではない。それなのに、明らかにこのあたりの住人でない者の姿を、それも数日間にわたって、複数のネイル村の村人が目撃しているのだ。
　そのことは、マァムもシモンも把握していた。
　だが、それについては、二人とも、少女たちには語らなかった。

　マァムは、この日の仕事を終え、自宅に戻ると、湯を沸かした。年の瀬も近づき、寒さが厳しい季節になってきた。
　マァムは、保存用のガラス瓶から、はちみつ漬けのジンジャーを取り出し、カップに入れると、そこに熱い湯を注いだ。寒いときには、体を温める飲み物が欲しくなる。
　マァムは、ハニー・ジンジャーティーを飲みながら、今晩の夕食を何にしようかと考えていた。
すると、慌ただしく、玄関のドアが叩かれた。
「ヒュンケル！いるか！？」
　その声は、シモンだった。

ただならぬ様子に、マァムは急いで、玄関のドアを開けた。
　すると、そこには、シモンと、真っ赤に泣きはらした目をしたミーナが立っていた。
　マァムは驚いて二人に尋ねた。
「ミーナ？どうしたの？」
「マァムお姉ちゃん・・・。」
　ミーナは、泣き顔のまま、マァムを呼んだ。
　シモンも難しい顔をしていた。
　彼は、きょろきょろと室内を見回すと、マァムに尋ねた。
「ヒュンケルはいないのか？」
「今日はうちの畑に行っているわ。夕方には帰ってくるはずだけど。
　何があったの？」
　二人のただならぬ様子に、マァムは尋ねた。シモンとミーナは二人で顔を見合わせている。
　シモンはしばらく逡巡していたが、彼よりも先にミーナが口を開いた。
「エリカお姉ちゃんが一人で森に行って、帰ってこないの！」
　ミーナは叫んだ。
　マァムは驚いて声をあげた。
「どういうこと？だって、シモンが一緒に行くって・・・。」
　ミーナが泣きながら答えた。
「エリカお姉ちゃん、お兄ちゃんは忙しいだろうからって先に一人で行っちゃったの！それで・・・。」
「俺がエリカを迎えに行ったら、もういなかったんだ。」
　シモンは、苦々しげに言葉を絞り出した。
「俺も始めはそんなに深刻に考えていなかったんだ。危ないって言っても、真昼間だったし、すぐに帰ってくるだろうって。エリカがどこにわな仕掛けたのかも聞いてなかったし。
　でも・・・。」
　シモンはそこで口をつぐんだ。言葉を区切ったその様子に、マァムは嫌な予感がした。
　マァムは尋ねた。

「何かあったの？」
　シモンは、重々しく口を開いた。
「・・・森に警戒に出ていたおじさんが、変なところに籠が落ちてたって、拾ってきたんだ・・・。
　エリカのだった・・・。」
「え？」
　見ると、ミーナが、藤籠を両手で持っていた。その持ち手の部分に、明るい色のスカーフが結んであった。マァムも見覚えがあった。エリカが持っていたものだった。
　マァムは上ずった声で、ミーナに尋ねた。
「・・・これが・・・落ちてたの？」
「うん。近くにナイフもあったって。」
　マァムは、真剣な眼差しで二人に尋ねた。
「エリカは、いつ頃行ったの？」
「お昼頃。」
「でももう、２時間以上経つ。さすがに帰ってこないのもおかしいし、籠やナイフが森に落ちてたって、おかしすぎるだろ？
　ここのところ、森も不穏だったから、ヒュンケルに相談して一緒に探しに行ってもらおうと思ったんだよ。」
　冬至を間近に控えた今の季節は、日没が早い。間もなく、太陽が傾き始める時間になる。闇に包まれたネイルの森は極めて危険だ。かつては魔の森と言われたくらいの、迷いやすい、モンスターや野生動物の多い深い森だ。
　その上、いまは、大きな懸念があった。
　マァムは、しばし考えていたが、やがて顔をあげると、きっぱりとした口調で二人に言った。
「・・・私が行くわ。」
「マァム！？」
「お姉ちゃん？」
「森のことは、私の方がよく知っているわ。ヒュンケルを待っている時間もないもの。私が行くわ。」
　マァムは、心配そうに眉根を寄せたミーナに微笑みかけた。そうして、わざと明るい声を出した。

「大丈夫よ、ミーナ。すぐにエリカ見つけて戻ってくるから！」
　マァムはシモンに目を止めると、彼に釘を刺した。
「ヒュンケルには言わないでおいて。心配させるといけないから。大丈夫！すぐに帰ってくるからね。」
「あ、ああ・・・。」
　その有無を言わせないマァムの口調に、シモンは、ためらいながらもうなずくしかなかった。

　ヒュンケルは、ぐるりと森の中を迂回して歩きながら、ネイル村へと足を進めていた。
　彼らの畑からネイル村までは、村人の往来する小径が引かれており、村を取り囲む森に大きく踏み込まずに帰ることができる。
　だが、ヒュンケルは、この日は、畑からの帰り道、あえて大きく森に足を踏み入れながら、村への帰途についていた。
　ヒュンケルは、ふと、視線を大地に落としたまま、何かに気付き、膝を折った。彼は、しゃがみ込むと、その手で枯草をかき分け、その下に現れた地面をじっと観察した。
　その大地に現れた無言の警告に気付き、ヒュンケルは、いぶかしげに眉をひそめた。
　ヒュンケルは、大地に視線を落としたまま、数歩、移動し、また腰を落とすと、その地面の表面を手で探り、そこに残されたわずかな情報を読み取ろうとしていた。
　しばらくすると、ヒュンケルは立ち上がった。
　そして、彼は、ネイル村のある東の方向とは異なり、北の方角に眼差しを向けた。
　その眼差しは、かつての将の目、そのものであった。

　マァムは、エリカの籠とナイフが見つかったという地点を聞き出し、その地へと走った。
　方角と距離を聞き、地点を定める。
すると、森の中で、少し木々の隙間があり、空間ができているところにたどり着いた。村人の話からすると、おそらくここだろう。
　マァムはこの場所には見覚えがあった。

以前も、このあたりの者ではない人間がいたと村人に聞き、ヒュンケルとともに様子をうかがいに来た場所だ。
　マァムは、周囲の様子をうかがうと、周辺の木に、新しい切れ込みが入っていることに気付いた。それも一つではない、複数だ。
　地面の草は踏み固められており、いくつかの細い木は、ちょうどマァムの腰当たりの高さで折れ、倒されていた。
　マァムは、太い幹につけられた傷跡に手を触れた。まだ新しく、その隙間から生木の白い肌が覗いていた。
－刃物の跡・・・。
　マァムは、唇を噛んだ。
　何もないようなこんな場所で、剣やナイフを振りかざす必要はない。同じ木の幹に、複数の刀傷がつけられていることからすると、あえて、この木を切りつけたということだろう。
　それは何のためか。
　マァムは、嫌な推測にたどり着き、息をのんだ。
—・・・威嚇のためね。
　そして、不自然に倒れた細い木、踏み固められた下草。
　複数の人間がこの場におり、争った様子が見て取れた。
　この場に、エリカの籠とナイフが落ちていた。
　威嚇し、争った相手は誰か。
　マァムの背を、冷たい汗が流れた。真冬だというのに。
　マァムは、気を引き締めると顔を上げ、周囲を見渡した。木々の倒れ方や下草の踏み固められ方から、ここからどの方向に進んだのかが分かった。
　マァムは、焦る気持ちを抑えながら、注意深く足を進めた。
　エリカの無事を祈りつつ。

　陽が沈み始めたころ、ヒュンケルはネイル村に戻った。
　すると、村の入り口付近の路地で、アレクとシモンが立ち話をしていた。だが、普段とは異なり、彼らはひどく深刻そうな表情を浮かべていた。
　不審に思って、ヒュンケルが彼らに視線を向けていると、二人もヒュンケルに気付いたようだった。

だが、ここからも、普段と異なっていた。
いつもなら気さくに声をかけてくる二人だ。
しかし、アレクはヒュンケルの方を向いているものの、シモンが彼の腕を引いて何やら制止している。
常にない雰囲気を感じ取ったヒュンケルは、いっそう、眉をひそめた。
すると、アレクがシモンを振り切って、ヒュンケルを呼び止めた。
「ヒュンケル。」
「アレクっ！ヒュンケルには・・・。」
「だからって、こいつに言わないわけにはいかないだろう！」
「でも、マァムが・・・。」
「マァム？マァムに何かあったのか？」
ヒュンケルに聞きとがめられ、シモンは顔色を変えた。
「あ・・・いや・・・。」
返事はないが、その表情が、彼の内心を明確に物語っていた。
ヒュンケルは嫌な予感に襲われた。
シモンに近づき、問いただそうとした。
すると、アレクが言葉を継いだ。
「まだわからない。何かあったのは、マァムじゃない。エリカだ。」
ヒュンケルはアレクに顔を向けた。状況がつかめなかった。
アレクは言葉をつづけた。
「エリカ、わかるな？ミーナの隣の家の子だ。」
ヒュンケルはうなずいた。
ミーナのことはマァムがかわいがっており、彼らの家にもよく来るので、よく知っていた。ミーナが、ときどきエリカと一緒にいるところも見かけていた。ヒュンケル自身はエリカと言葉を交わしたことは数える程度しかなかったが、もちろん、わからないということはなかった。
「エリカが、森に、食料を採りに行った。ここのところ、森が不穏だっただろう？だから、シモンがついていくと言ったんだが、森の状況を知らされていなかったエリカは一人で先に行ってしまったん

だ。
　そうしたら・・・。」
　アレクは、ここで声を落とした。
「森の中に、エリカの籠とナイフだけが落ちていた。村のやつが見つけたんだ・・・。」
　ヒュンケルは短く尋ねた。
「エリカは。」
「まだ見つかっていない。」
「籠とナイフが見つかったのはどの辺だ？」
「村から北西に出た方角で、２マイルくらい進んだところだ。
　少し開けていて、以前から、ときどき、このあたりの者じゃない奴らを見かけていたあたりだ。」
　その場所には、ヒュンケルも心当たりがあった。以前、村の者に言われて、マァムとともに警戒に行ったことがある。そのときは、誰にも会わなかったのだが。
　ヒュンケルとマァムが急いで行って３０分、エリカの足では１時間くらいかかる地点だった。
　エリカの行方も気がかりではあったが、ヒュンケルには、何故マァムの名が出ていたのか、気になって仕方がなかった。
　だが、エリカが帰ってこないとマァムが知ったとしたら、彼女がこの事態を放っておけるはずがないであろうことは、ヒュンケルにも容易に想像がついた。
　ヒュンケルは、嫌な予感を胸に抱きつつ、それを面に出さないように、二人に話しかけた。
「それで、マァムはどうしたんだ？」
　シモンは、不安げにアレクを見上げた。
　アレクは、一瞬、言葉に詰まったが、すぐに意を決したようにヒュンケルに答えた。
「マァムは、エリカを探しに行った。」
　予想通りの答えだった。ヒュンケルは、焦る気持ちを抑えながら、アレクに問うた。
「いつごろ、出ていったんだ？」
「もう２時間くらい前だ。

・・・二人とも、帰ってこない。」
　重々しいアレクの言葉に、ヒュンケルは、目の前が暗くなるのを感じた。マァムやエリカは、森とともに育っている。ただ道に迷っているわけではないということはすぐに推測できた。
　エリカがけがをしていたり、あるいはトラブルに巻き込まれていたとしても、マァムが一緒なら、もう帰ってきていてもおかしくはない。
　だが、いまだ、二人の姿はなかった。
　ヒュンケルは、胸に沸き起こる嫌な予感と戦いながら、慎重に言葉を紡いだ。
「マァムまで帰ってこないということは・・・何かあったのかもしれん。俺が様子を見に行く。」
　すると、シモンが声をあげた。
「え、でもお前、森の道分かるのか？もう陽も落ちるぞ。」
　だが、ヒュンケルはこともなげに言った。
「大丈夫だ。何かあったときのために、森の地図は、マァムと作っている。大体の地形は頭に入っている。」
「すげ・・・。」
　ヒュンケルはその面に真剣な色を浮かべ、二人に向き直った。彼は、すでに、普段とは異なる、戦士の目に戻っていた。
「何もなければいいが・・・マァムたちがすでにトラブルに巻き込まれている可能性も高い。万が一のときに、二人に頼みたいことがある。」
　ヒュンケルの依頼に、アレクはうなずいた。
「ああ。何でも言ってくれ。」
　ヒュンケルは短く礼を言った。
「助かる。
　人をそろえてほしい。弓を使える人間を１０人くらい。
　射るだけでいい。精度は問わない。」
「それは、シモンならすぐに分かるだろう。集められるな？」
「あ、ああ。」
　アレクに話を振られ、シモンは戸惑いながらもうなずいた。彼はネイル村の住人の中でも猟に長けている。弓も得意だ。シモンから

弓を教わった者も多かった。
　ヒュンケルは指示をつづけた。
「それから、コンラートに待機してもらっていてくれ。キメラの翼もだ。いざとなったら彼に行ってもらうところがある。」
　あげられた名に、アレクは不思議そうに首を傾げた。
「コンラート？あいつじゃなきゃダメなのか？」
　だが、ヒュンケルは、端的に答えた。
「彼が一番いい。長老様の孫で、その跡を継ぐ者だ。彼でなければできないことがある。」
　アレクはすぐにヒュンケルの意図を把握し、うなずいた。
「ああ、わかった。俺が話してくる。」
「助かる。」
　ヒュンケルは、二人に視線を向けたまま、指示をつづけた。
「万が一のときにはこうする。覚えておいてほしい。」
　そう言って、彼の意図を二人に伝えた。
　彼らが懸念する「万が一の事態」。それは、ここ数日ネイル村の近辺に出没していた見慣れない旅装の一段だった。
　ただの旅人ならよい。
　だが、それが何か別の目的を持っているのであれば、マァムもエリカも無事では済まない。
「俺は先に行く。杞憂ならいいのだが・・・。
　もし、１時間たっても戻らなければ、出発してくれ。エリカが姿を消したあの場所で落ち合おう。」
　ヒュンケルの言葉に、二人はうなずいた。
「分かった。」
「気をつけてな。」
　ヒュンケルは、急いで自宅に戻ると、リビングの奥に立てかけていた一振りの剣を手にした。今の彼の腕力でも震える、細身の剣だ。
　ヒュンケルはその剣の柄を握り、力を込めた。
　これをふるわずに済むことを祈りながら。

　ヒュンケルがネイル村に戻ったちょうどその頃、マァムは森の中

に奇妙な光景を見つけていた。
　マァムは、エリカの籠が見つかった地点から北上し、木の影に潜みながら、少しずつ、歩みを進めていた。
　すると、見慣れない旅装の男が、森の中を北に歩いているのを見つけた。
　マァムは、その男の後を追うことにした。
　一定の距離を保って気配を消し、相手に気付かれないように足を進める。
　そうしていくと、不意に、その男が姿を消した。
　マァムは驚いて、その男の消えた方角に進んだ。
　すると、その男が消えた地点の近くまで行ったときに、マァムは、奇妙な光景を見つけたのだ。
　平らな地面だと思っていた場所が、落ちくぼんでいる。
　そして、その窪地から、分厚い布地でできた小山のようなものが頭の先を見せて、のぞいていた。
　マァムは、かつてヒュンケルとともに作った森の地図を頭に浮かべた。
　ヒュンケルがネイル村で暮らすようになってすぐ、彼は、森の地形を知りたいと言った。ネイル村で暮らすのに、周辺の森で迷っているようでは話にならないと彼は言っていた。
　彼は、マァムから森の地形を聞くと、それを地図に起こしていった。
　さらに、彼は、実際に自分で森を歩き、詳細な地形をその地図に書き込んでいった。
　なだらかな隆起がある場所。
　窪地になっている地点。
　川の流れ。
　沼地の位置。
　木が混み合って生えているところ。
　ぽっかりと開いた空間になっている箇所。
　そういった細かい特徴を彼は自分の目と足で把握し、それを地図に落としていった。
　マァムはその地図を脳裏に蘇らせた。

確かに、この下には、大きな窪地があった。
だが、木が混み合っており、なかなかそれに気付かない場所でもあった。木の生え方の錯覚で、よく見なければ、そのまま平らな地面が続いているようにも見える。
マァムは、見つからないように注意深く窪地に近づいた。
そして、地面に伏せ、さらに木々の間から様子をうかがった。
すると、先ほど見えた布の頭のようなものは、大型のテントだとわかった。遊牧民が使うような、何本もの柱で支えて、その上から厚手の生地で覆う形式のものだ。
そのテントの大きさと漏れてくる話声から、中に７～８人の人間がいるであろうことは予想できた。
それが、一つだけではなかった。
３つ、いや、４つくらいだろうか。そのくらいの数のテントが見えた。
まだ日の落ち切らないこの時間帯では、テントを出入りする者たちの様子が見て取れた。
そこにいたのは、男性ばかりだった。
どの者も、テントの外にいる者たちは、しっかりとした防寒具に身を包み、腰に剣を履いている。
荒れた雰囲気を身にまとい、粗野な笑い声が聞こえてきた。
そして、その出で立ちとは不似合いに、手に重そうな袋を携えている者もいた。
そのずっしりとした重みは、遠目にも感じられた。
おそらく、中身は金だろう。
マァムは、隠れるようにしてテントを張り、荒い雰囲気で、そのくせ多額の金を持っていると思われる彼らの正体を推測した。
—・・・盗賊団・・・。
マァムの脳裏をその言葉がよぎった。
まさか、エリカはここにいるのだろうか。エリカがいなくなった場所からここまでは、さほど遠くはなく、３０分もかからない。
マァムは慎重に様子をうかがっていたが、その視界の中に、鮮やかな色を見つけ、マァムは思わず声をあげそうになった。
手前のテントの入り口の布が翻り、中から男がひとり、出てき

た。
　だが、その男は、右手を横に伸ばしており、その先に、見覚えのある鮮やかな色が踊った。
　背中に流れる、濃いめの亜麻色の髪。
　普段は後ろで一つにまとめられているのが、解けている。
　明らかに少女だ。
　両腕を後ろに回したまま、隣の男に腕を引かれている。
　後ろ姿であったが、マァムにはすぐに分かった。
―・・・エリカ！
　男は、エリカらしい少女を隣のテントに連れていくと、彼自身はすぐにまたそこから出てきた。
　粗野な笑い声が遠くから聞こえてきた。
　マァムは唇を噛んだ。
　すぐにでも飛んでいきたい。
　だが、盗賊たちの人数は、少なく見ても２０人はいる。
　村に戻って応援を呼ぶべきか。
　それとも。
　マァムは、しばしの間、思案に暮れた。
　不意に、マァムの脳裏に、いつか村で見た、ヒュンケルの立ち合う姿が思い起こされた。
　その日の夜の彼の言葉が蘇る。
ーもう、あの頃の腕力やスピードを取り戻すのは、無理だな。
　そして、この腕に抱きしめた彼の温もりも。
　マァムは、きゅっと唇を結ぶと、心を決めた。
　夜を待とう。
　マァムは、物陰に潜んだまま、森が闇に覆われるそのときを待った。